〈資料〉

コミュニケーションスキルを習得するための成人看護方法演習の検討

友竹　千恵、伊藤　まゆみ
（看護学部看護学科）

An Examination of Adult Nursing Method Practice for Acquiring Communication Skills

Chie TOMOTAKE, Mayumi ITO
(Department of Nursing, Faculty of Nursing)

成人看護方法演習は、成人看護学実習の準備科目として位置付けられている。成人看護方法演習のうち、慢性期・終末期ケアでは、対象との援助関係の構築のためのコミュニケーションスキルの習得が重要である。今回、コロナ禍のため対面での演習が困難な状況な中、オンラインでシナリオを基にしたロールプレイによる演習を展開したので、概要と今後の課題を報告する。学生は、成人看護方法論Ⅱにおいて展開した事例援助計画の立案とシナリオ作成、グループ内での意見交換を経て、シナリオを基にしたロールプレイを行った。緊急事態宣言下における工夫として、意見交換やロールプレイはGoogleクラスルームとZoomブレイクアウトルームを活用した。演習は対象と援助関係を構築するためのコミュニケーションを学ぶうえで有意義であったと考えられた。今後、さらに臨場感のある演習内容となるよう工夫を図りたい。

キーワード：慢性期、終末期、成人看護方法演習、コミュニケーションスキル、ロールプレイ

はじめに

新型コロナウイルス感染症の拡大と感染者の増加は、看護基礎教育に大きな影響を及ぼした。2020年2月の文部科学省・厚生労働省による事務連絡「新型コロナウイルス感染症の発生に伴う医療関係職種等の各学校、養成所及び養成施設等の対応について」(2020a)、同年6月の医療関係職種等の各学校、養成所及び養成施設等における実習等の授業の弾力的な取扱いの具体的な取組事例や個々の学生等の状況に応じた学習機会の確保等に関する事務連絡（2020b）を受け、成人看護学においても、講義・演習・実習における学生の安全確保と学習目標の達成を充足するための検討が重ねられた。このような中、2020年度の「成人看護方法演習（以下、本科目とする）」も、効果的な方法論の模索と、教員自身のスキルの習得とを並行しながら、オンライン授業へと移行した。

実施後の振り返りでは、オンラインを利用した演習の課題として、五感を活用したコミュニケーションが挙げられた。コロナ禍により看護基礎教育をめぐる環境が変わっても、看護におけるコミュニケーションの重要性は変わらず、慢性期・終末期の看護を学ぶ上でも不可欠である。そこで2021年度の本科目の慢性期・終末期では、オンライン（一部対面）演習の中で、対象との援助関係を築くために必要なコミュニケーションスキルの習得をねらった構成へと見直した。本稿では、コロナ禍における実習・演習の概観と共に、2021年度の本科目（慢性期・成人期）の実施状況について述べる。

1．コロナ禍における成人看護学教育の動向と課題

⑴　看護基礎教育におけるコミュニケーションの重要性について

コミュニケーションは、コロナ禍以前より、看護実践能力の養成における課題として挙げられ(2011, 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会)、看護教育モデル・コアカリキュラムでは9つの基本的な資質・能力のひとつとして示されている（2017, 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会)。2019年に公表された看護基礎教育検討会報告書（2019）では、社会全体のICT化への対応と、学生を取り巻く環境面の変化に対応した患者-看護師関係づくりの強化の必要性も示された。看護基礎教育における課題として、生活環境の変化に伴う様々な対象を理解する学生の能力や信頼関係の構築、コミュニケーション能力の育成が指摘された。その背景要因として、医療・介護分野におけるAI（Artificial Intelligence：人工知能)、IoT（Internet of Things：モノのインターネット）等の情報通信技術（Information and Communication Technology: ICT）の導入の加速化と、学生自身のIT機器の扱いへの習熟が取り上げられた。

佐居（2019）は、対面ではなくSNSのようにWeb上で展開するスタイルに慣れてしまうと、学生がナースや患者との多様なコミュニケーションに困難を感じたり、コミュニケーション能力の成熟度が下がる一方になるだろうと述べ、従来の教育の積み上げと多様な展開の重要性を説いた。

樋勝・鈴木・田中（2021）は、病院実習と学内の対面演習を全てオンラインに切り替えた1年次のコミュニケーション実習を報告した。病棟実習の代替学習として、看護学生-学生間や看護師-学生間のコミュニケーション場面の動画教材を複数作成し、学生はプロセスレコードを作成し、グループワークを行った。学生は､看護学生としての誠実な態度や､話し方の留意点、話の聴き方、話をするための事前準備の必要性、連続性を持ち患者と関わることの大切さを学んだ。今後の課題として、緊張感を伴うシミュレーション学修や、地道に歩み努めるコミュニケーションスキルの体現の場の必要性も述べられた。

看護基礎教育においては、コロナ禍を契機にオンラインを活用した効果的なコミュニケーション能力の育成の模索がされている。今後の課題は、対人関係の構築・深化のためのコミュニケーションスキルや、実際の援助を通じてのコミュニケーションを学ぶための有効な方法である。

⑵　コロナ禍における成人看護学の演習・実習に関する動向

コロナ禍における成人看護学の演習・実習に関する動向を、2020年～2121年に公表された実践報告･研究報告より概観した。学習目標の達成に向けた工夫の傾向として、机上で学ぶ看護過程はLMSや遠隔会議システムにて行われ、演習や実習はバーチャルシミュレーションや動画教材の活用にて行われていた。学生間や、学生-教員間の関係作りやコミュニケーションに焦点を当てたものはみられなかった。以下に一例を述べる。

益田・小田嶋（2020）は、クリティカルケア看護学実習とがん看護学実習をハイブリッド型により行った。対象学年は4年次生であり、実習期間は各2週間であった。具体的内容として、模擬事例による看護展開を行った。記録はLMSにより提出し、カンファレンスはZoomで実施し、援助の実践をBody Interac TM(BI)というオンラインによるバーチャル・シミュレーションに置き換えた。クリティカルケア看護学は、従来ERで実施していた「気づきのトレーニング」、がん看護学については患者とのコミュニケーション実習を置き換えた。バーチャルシミュレーションの効果として、通常の実習以上に自分で考える力がついたとした一方、臨地実習では情報を意味ある形として収集する学習プロセスが、paper patients では情報をまとめて与える形に置き換わり、知識に基づいた安全なケアの実施が課題であると述べた。

藤浪・河野・寺田他（2021）は、成人看護学の学科目全般における映像システムの活用と課題について述べた。講義ではコンテンツの一部再生や､事前･事後学修の学習教材として活用した。オンライン実習においては、事例コンテンツを用い、看護過程演習やグループディスカッションに用いた。また、看

護技術演習や、手術室看護師との遠隔カンファレンス、臨地実習再開後の学習支援ツールとしても用いた。講義における効果として、学生から、講義内容の理解が深まり授業に集中できるといった意見があった。豊富なコンテンツにより様々な状況に対応できたとする一方、学修目標やねらいに添う使用方法や効果の検証が課題であると述べた。

牧野・中田・山本他（2021）は、4年次の選択科目「急性・クリティカルケア論」の実践状況を報告した。授業構成は、紙面事例を用いた個別学習を在宅学習と、学内Webシステムmanabaとオンライン会議システムZoomの活用によるグループディスカッション、バーチャルシミュレーターを用いたシミュレーション演習の3部であった。これら3部構成の学びの統合は、視聴覚からの気づきの促進や、患者の反応から臨床推論をつなぐ学びとして有用であった。今後の課題として、教材化場面の選択や応用方法、視聴覚教材などの組み合わせや科目の位置づけを考慮した授業計画の組み立てであると述べた。

⑶　オンラインによる成人看護学関連の演習の実践事例

乾・大山・氏原他（2021）は、3年次生を対象にオンデマンド授業とライブ配信を併用し、LMSを活用し、紙上事例の展開による演習を行った。紙上事例は人工膝関節全置換術を受ける患者であり、学生が提出した課題に教員が個別対応をしながら学習を支援し、学生は課題の修正を行い全て整えて提出出来た。遠隔演習において、看護過程の思考の重要性の理解が促進されたという効果がみられた一方で、学生間での情報交換を推進したが、全ての学生の有効な意見交換には限界があった。また、個々の学修内容の差の発生や、学生の理解内容等に関する具体的な生の声の把握が難しかったことを課題として挙げた。

片穂野・高比良・吉田他（2020）は、3年次生対象の成人看護学の演習を、紙上事例の展開とシミュレーション演習を組み合わせ展開した。紙上事例は、急性期にある壮年期の虚血性心疾患で発作を生じた患者であり、学生は、個人ワークの後、グループでシミュレーターを用いシナリオシミュレーションによる演習を行った。シナリオは紙上事例の患者の発展状況を複数提示し、グループ内のペア学生が異なる状況を演習できるよう構成し、学生は、シミュレーターの観察とデブリーフィングを繰り返した。学生からは、ペアとの情報共有と連携の重要性や、自己の言動が患者に与える影響についての反応があった。紙上事例とシミュレーションを連結した演習は、テクニカルな学習に加え、状況認識やコミュニケーション、チームワークなどのノンテクニカルスキルの向上を目指す学びとなる可能性があると述べた。

以上の報告より、紙上事例の展開はオンラインの活用が有用であり、技術演習は、対面で意見交換を行うことが有用であるとの示唆を得た。また、シナリオを用いたシミュレーション演習は、技術の学習に加え、関係作りや他者理解のためのコミュニケーションを学ぶ機会として重要であると考えられた。

コロナ禍であっても慢性期・終末期の成人看護学の学びを止めないための方向性として、オンラインの活用により、患者の療養や生活場面を知る機会と看護師の行う実践から学ぶ機会を補完するとともに、個別的な健康課題の特定と援助を導き出し、実施した援助を評価するためのコミュニケーションスキルを学ぶ演習内容を構築することとした。

2．成人看護方法演習の実施状況

⑴　科目の位置づけ

本科目の慢性期・終末期は、2年次秋学期に開講された成人看護方法論Ⅱにおいて展開した看護過程を発展させる3年次春学期の科目であると共に、6月より開始される成人看護学実習Ⅱ（慢性期・終末期）において、受け持ち患者への看護を通じ、対象への個別的ケアを実践現場で学ぶための導入としても位置付けている。本科目は、講義と演習により、成人期の対象事例を通して、より個別的な健康課題の特定と援助を導き出せるよう学ぶ。本科目の学習目標を**図1**に示す。

具体的には、成人看護方法論Ⅱで展開した対象の健康障害の程度と生活への影響のアセスメント・健康上の課題・看護の方向性・看護診断を抽出する過程を、本科目において再度振り返りながら、援助の目標や目標達成に向けた具体的な援助計画が論理的に立案できるように学習し、援助計画の実施・評価

1. 成人看護学における看護の方法論として看護過程を構成する要素が述べられる。
2. 健康段階別経過別看護を実践するために必要な知識（対象理解の枠組みと経過別看護目標）を説明できる。
3. 対象の疾患や病状から身体機能障害の程度，その障害や治療が心理や生活に及ぼす影響を理解するための科学的な指標について説明できる。
4. 対象の健康段階と対象が生活を営むためのケアニーズに応じて，科学的，論理的に健康課題を特定し，必要な援助を導き出す方法について説明できる。
5. 対象の健康段階と対象が生活を営むためのケアニーズに応じた援助をより安全・安楽に実践するために必要な技術を統合し，構築する方法を説明できる。
6. 初回に構築した援助を問題志向的に評価・記録することでより個別的な援助へと修正されるプロセスを体験する。

図１　学習目標

1. 開講時期：3 年春学期
2. 構成

- 演習科目全 15 回のうち、慢性期・終末期は合計 6 回
- 2 年秋学期の成人看護方法論Ⅱ（慢性期・終末期）において、壮年期女性の糖尿病患者事例、または壮年期男性肝細胞癌患者のうち、指定された 1 事例のアセスメント・援助の方向性・看護診断の抽出まで学習。演習では援助計画の立案・実施・評価を学習する。

回数	方法	授業内容
1	遠隔	授業ガイダンス
8・9	遠隔（Zoom）	援助計画立案 • ブレイクアウトルームによるグループワーク。 • グループ内で、学生それぞれが異なる状況設定場面を展開できるよう、フィジカルイグザミネーション（OP）、教育プラン（EP）を立案できるような状況を対象ごとに 3 場面ずつ設定。 • 学生は、割り振られた対象・状況設定から、必要な援助とその手順（シナリオ）、援助内容の評価の視点を立案。
10・11	遠隔（Zoom）	グループ内意見交換・全体意見交換 • グループ内意見交換はブレイクアウトルームにより実施 • 各学生は、立案した援助計画（シナリオ）をプレゼンテーション • グループ内で、それぞれの役割の立場で感じたことを述べ、よりよりコミュニケーションについて意見交換 • 全体意見交換でグループ内意見交換による学びや課題を発表
14・15	対面 ⇒遠隔（Zoom）に変更	援助計画の実施・評価・修正 • 立案した援助計画（シナリオ）によるロールプレイ。 • 役割分担：計画立案者は看護学生、他の学生は患者、家族、看護師、観察役等を担当。 • ロールプレイの流れ ① ロールプレイ 1 回目：• グループメンバーが患者・家族・学生・看護師・観察役を担う ② ディスカッション：• それぞれの役割から、対象にとって適切なコミュニケーションを振り返る；• 看護学生役はシナリオを確認し修正 ③ ロールプレイ 2 回目：• シナリオの修正箇所の実施 ④ 実施記録の作成：• 1 回目、2 回目のロールプレイを基に、援助の結果を記述

図２　成人看護方法演習（慢性期・終末期）の構成

を学ぶ成人期にある対象の健康段階（慢性期・終末期ならびに急性期・回復期）と生活過程に合わせた援助が提供できるよう、科学的・論理的に看護を導き出すプロセスを重視している。

⑵　慢性期・終末期演習の概要

慢性期・終末期の演習では、対象により安全で安楽な援助が提供できるようその技術を体験的に学習すると共に、目標達成に向けて日々の援助がより個別的なものになるよう、援助に対する評価を学ぶ。

2021 年度の本科目慢性期・終末期の演習の概要とスケジュールを**図２**に示す。第１回目の授業ガイダンスは、感染拡大状況をふまえ、Web 会議システム Zoom と GoogleClassroom を用い遠隔授業とした。科目のねらいや学習目標、学習方法、評価方法等のオリエンテーションを行った。

第８回～第 11 回も遠隔授業で、各回に教員が学習内容､方法について説明後､グループワークを行った。教員は、Zoom オンラインにより、学生全員に各回の学習内容の説明や、質問や疑問を受けた後、ブレイクアウトルームを開始し、グループワークを行った。グループワークの運営は複数の教員が行った。グループを担当する教員は各グループのブレイクアウトルームに入室し、学生からの質問の回答や発問を行った。授業の最後は学生を一同に集め、学生から出た質問への回答の説明や総括を行った後、次回までの課題について説明し、GoogleClassroom にも掲示した。

第14回･15回は､事例の患者に対する観察プラン、教育プランの実施・評価・修正を行った。対面での演習を予定していたが感染拡大状況を鑑み、計画を修正し、オンラインでの実施となった。直接対象に触れてアセスメントを行うような観察プランの一部はオンラインでの実施が難しく、後日の対面授業にて行うこととなった。

⑶　コミュニケーションスキルの学習を意図した演習内容

本科目の慢性期・終末期においてコミュニケーションスキルの学習を意図した背景を述べる。

まず、演習対象となる学生は、２年次の臨地実習が遠隔実習となり、患者や看護師と対面し関わる学習が未経験の状況であった。これまでのような学内での友人や教職員との交流も激減し、パソコンを介した個の学習環境の割合が増えている。加えて、オンラインでは同時双方向のコミュニケーションや相手の気配の読み取りが成立しにくい。慢性期・終末期にある成人期の患者への看護では、対象の日々の生活状況の理解や、セルフマネジメントを支援、全人的苦痛へのアプローチのために、対象との信頼関係の構築と、そのためのコミュニケーションは重要である。

以上のような背景をふまえ、学生が対象の感情や表情を感じ取る演習を通じ、他者の立場や状況に即したコミュニケーションを学ぶ機会を設けることとした。具体的には、第８回～第 11 回の授業では、援助計画の立案に加え、援助のシナリオ作成、学生間の意見交換を取り入れた。第 14 回・第 15 回の演習において、作成したシナリオをベースとしたロールプレイを取り入れた。

作成するシナリオは、各事例の観察プラン、教育プランのいずれか１つとした。学生は、自分が担当するプランを援助の導入から実施、評価までの一連の流れと評価の視点を、実際を思い浮かべながら立案した。シナリオにはロールプレイ時に登場する家族、看護学生、指導看護師等も盛り込んだ。座学最後の第 11 回で、援助計画やシナリオの現実性、妥当性についての検討と、学生が担う役割のイメージ化を図るために、Zoom ブレイクアウトルームにおいて､グループ内での各学生のプレゼンテーション、意見交換を行った。学生はグループメンバーからの意見をふまえ、シナリオの修正を行い、第 14 回・15 回に臨んだ。教員は、学生が各自の役割を再確認しロールプレイに臨めるよう、学生が提出した援助計画とシナリオを、予め GoogleClassroom に掲示した。

第 14 回･15 回のロールプレイにあたり、１グループの学生人数は５名～６名とした。壮年期女性の糖

尿病患者事例、壮年期男性肝細胞癌患者の各事例を展開した学生がなるべく均等となるよう配置した。タイムスケジュールは、ロールプレイと、振り返りを繰り返し行えるよう設計した。

⑷　学生の感想

演習終了後の学生から、シナリオ作成について「昨年、実習に行っていないことや演習に慣れていないこともあり、特に看護師や学生が行う声かけのイメージが掴みきれず､声掛けの内容に悩んだ」「どのような質問が来るのか、実際に質問が来たときに答えられるのかといった不安を感じた」「いろいろ反応を予測していても、予想外の反応が返ってきたときに、対応に困ってしまいそうだなと感じた」などの反応があった。「実際の患者のイメージが難しい」「説明時にどうしても一方的になりがちになりがちだった」「機械的な説明や観察になってしまう」という感想もみられた。

シナリオを基に行ったロールプレイについては「患者の反応を予想することができた」「場面を想像すると、どんな質問が来るかをイメージできることがあった」「イメージトレーニングができた」「患者の反応を客観的にとらえる手助けとなった」「手順があるため、観察や説明漏れが生じにくい」「他者の意見を聞くことで自分の課題が明確となり修正ができた」などの意見があった。他にも、わかりやすい話し方、説明の間をとる必要性といったコミュニケーションスキルの改善点や、やってみて不足部分に気づいた、患者の情報を様々な角度から得ることができ、次の援助を考える良い機会となったという感想もあった。

おわりに

COVID-19の流行状況に応じた講義・演習・実習への対応は現在も続いている。今後も状況の変化に柔軟に対応しつつ、慢性期、終末期看護の演習方法の工夫・検討をすすめたい。

援助を目的としたコミュニケーションと通常の会話との違いは、説明や観察の根拠となる知識と、援助のゴールまでの筋道を基に、対象の反応を確認しながら、対象の意向をふまえ進めるところである。シナリオ作成とロールプレイを取り入れた演習で学生が対象とするのは、架空の患者に扮したペアの学生であるため、患者に直接接し対応する経験とは異なる。しかし､目的を持ったコミュニケーションや、相手の反応を基にしたやりとりから学ぶ効果はあると考える。

今後は､学生が臨地の様子をイメージできるよう、演習内容や方法の検討を図りたい。

《引用文献》

大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会（2011）『大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会 最終報告』,（https://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r9852000001vb6s-att/2r9852000001vbk2.pdf）（2021 年 10 月 27 日最終閲覧）

大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会（2017）『看護学教育モデル・コア・カリキュラム ～「学士課程においてコアとなる看護実践能力」の修得を目指した学修目標～』,（https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/__icsFiles/afieldfile/2017/10/31/1217788_3.pdf）（2021 年 10 月 27 日最終閲覧）

藤浪千種・河野貴大・寺田康祐他（2021）「成人看護学における映像システムの活用状況と課題」,『聖隷クリストファー大学看護学部紀要』, 29, 27-33.

樋勝彩子・鈴木彩加・田中加苗他（2021）「コロナ禍におけるコミュニケーション実習：動画を通して学ぶ患者とのコミュニケーション」,『聖路加国際大学紀要』, 7, 177-182.

乾友紀・大山末美・氏原恵子他（2021）「成人看護学における看護過程演習の遠隔授業による展開」,『聖隷クリストファー大学看護学部紀要』, 29, 35-43.

片穂野邦子・高比良祥子・吉田恵理子他（2020）「成人看護学でのシナリオシミュレーション演習における学生の学習経験～講義と実習をつなぐ看護過程演習の取り組み～」,『長崎県立大学看護栄養学部紀要』, 18, 47-55.

厚生労働省（2019）『看護基礎教育検討会報告書』,（https://www.mhlw.go.jp/content/10805000/000557411.pdf）（2021 年 10 月 27 日最終閲覧）

牧野晃子・中田諭・山本加奈子他（2021）「オンライン学習教材を活用した事例検討の実践と課題；2020 年度「急性・クリティカルケア論」：実践報告」，『聖路加国際大学紀要』，7，154-158.

益田美津美・小田嶋裕輝（2020）「バーチャル・シミュレーションを用いたハイブリッド型成人看護学実習の取り組み」，『医学教育』，51，557-560.

文部科学省（2020a）「新型コロナウイルス感染症の発生に伴う医療関係職種等の各学校、養成所及び養成施設等の対応について」，（https://www.mext.go.jp/content/20200603-mxt_kouhou01-000004520_2.pdf）（2021 年 10 月 27 日最終閲覧）

文部科学省（2020b）「新型コロナウイルス感染症の発生に伴う医療関係職種等の各学校、養成所及び養成施設等の対応について」，（https://www.mext.go.jp/content/20200603-mxt_kouhou01-000004520_2.pdf）（2021 年 8 月 15 日最終閲覧）

佐居由美（2019）「学生のコミュニケーション力をどう育むか」，『聖路加看護学会誌』，22，45-47.

（受付日：2021年10月29日、受理日：2022年1月12日）